

報告書内容

所属: 生命科学研究科 生理科学専攻

氏名: 鈴木迪諒

派遣先: ベルギー

派遣先大学: Leuven Catholic University

派遣先所属 Lab. Neuro-and Psychophysiology, Fac. Medicine

期間: 2015/11/08 ~ 2015/12/07

海外派遣先機関について

ルーベントリック大学(KULeuven)はベルギーの首都ブリュッセルから電車で20分ほど離れたところにあるルーベンという街にあります。街そのものが大学と言ってもいいようにキャンパスが街中に点在し、ベルギー第一の総合大学です。私は街の中心から少し離れたところにある医学部付属病院が隣接する Gasthuisberg キャンパスの Neuro-and Psychophysiology 部門 Wim Vanduffel 教授の研究室でお世話になりました。こちらの研究室は、ヒトおよび霊長類(サル)の覚醒下での fMRI 研究で世界をリードするグループの一つであり、その手法を学び自分の研究に活かすために訪問しました。Wim 教授の研究室と私が所属する伊佐教授の研究室は既に共同研究を行っており、交流があったことも派遣先選定の判断材料となりました。



派遣先キャンパス

派遣前準備

私の場合は5年一貫制に所属しており、比較的時間にもゆとりのもてる3年次に海外派遣制度を利用するのがよいだらうという先生方との相談を得て、今年度の派遣に申請しました。海外派遣事業の情報は既に研究室の先輩が以前に利用していたので、先輩からのアドバイス、派遣先情報については伊佐教授からお話を伺いました。

まずは、Wim 教授に受け入れの許可を頂くために、伊佐教授から連絡をしていただき、その後は Wim 教授、派遣先の秘書の方とのやりとりを中心に、準備を進めました。宿泊先は秘書の方に予約をしていただきました。ビザに関しては滞在機関が1ヶ月と短かったので必要ありませんでした。

また fMRI については全くの素人でしたので、派遣前からテキストなどで多少知識を得るようにはしましたが、理解は追いついていませんでした。英語に関しては、研究室にいる留学生との会話で多少の練習を日頃からしていたつもりです。

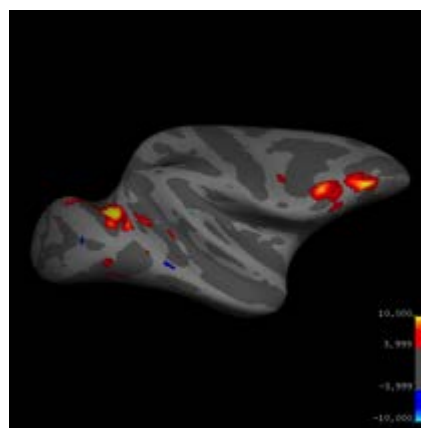
派遣中の勉学・研究

派遣中は、特に授業に出席する機会はありませんでしたが、毎週のラボセミナーやミーティングには参加しました。私の研究室とは違った雰囲気セミナーやミーティング形式で大変参考になりました。滞在中は fMRI のスキャンおよび解析手法を一通り経験するために、大学院生が fMRI のスキャンを行うときは同行し、見学させていただきました。また解析を中心に行い、一人の大学院生がアドバイザーとして付いてくれ、彼の指導のもと進めました。解析についても素人でしたので、彼にはいろいろと面倒をかけたことだろうと思います。最終的には下図のような脳活動のマップを作成することができました。解析のプロセスを一通り学ぶことができました。

私が所属している研究室とはまったく異なる手法を用いているグループなのですが、理解するのはなかなか大変でした。しかし、テキストで読んでいた内容に関して、実際に自分の目で見ることで理解が深まった印象があります。



MRI scanner



作成した脳活動マップの一例

海外派遣中に行った勉学・研究以外の活動

派遣中の週末はどこかへ観光に行くようにしていました。首都ブリュッセル、ブルージュ、アントワープ、ゲント、アントワープなどの都市に行きました。ベルギーは国自体が小さいため、電車で2時間もかからずにルーベンから各都市に行くことができました。また電車代も週末は往復キップが従来の半額で買えるためとてもお得です。おそらくこれにはベルギーの国柄があるように思います。ベルギー人は家族や友人とのつながりを大切にするそうで、週末は家族で過ごす方が多いようです。そのため KULeuven の学生も金曜日の夜には家族の暮らす地元に戻り、日曜日の夜に再びルーベンに戻ってくる生活をしている学生が非常に多かったです。

海外派遣費用について

渡航費、宿泊費は派遣制度から援助いただき、その他の生活費として、日本円で 11 万円ほど消費したかと思いますが、大半が観光費やお土産代ですので、もっと節約することは可能だと思います。今回私は、プリペイド形式のカードを所持して行きました。このカードはインターネット上で、両替・チャージができるため必要に応じてネット上でユーロに換金・チャージし、現地で引き出し、およびクレジットカードとして使用することができました。長い滞在となると出発時に大金を換金する必要がありますが、大金を持ち歩くことに抵抗感がある方には大変お勧めです。とても便利でした。

海外派遣先での語学状況

研究室のメンバーの出身地はバラバラで国際色が豊かでした。ラボ内では、みな英語を使用していました。ベルギーはオランダ語、フランス語、フレメッシュ語といった非常に多くの言語が使われる国ですが、生活に関しては英語で十分に対応可能でした。しかし、お店のメニューなどは英語表記して

いるお店もあれば、ないお店もありました。

私は英語が苦手(特にスピーキング・リスニング)ですが、なんとかまりました。

海外派遣先で困ったこと(もしあれば)

滞在中にパリ同時多発テロがあり、ブリュッセルのテロ警戒レベルが最高水準に引き上げられた際はいろいろと不安にはなりましたが、ルーベンはいつもと変わりませんでした。ただ、週末の観光の際は、至るところに警察官・軍隊が警備にあたっていました。

海外派遣を希望する後輩へアドバイス

このような機会はなかなか経験できるものではないので、希望する方は是非とも申請していただきたいと思います。コミュニケーションに不安がある方もいるかと思いますが、私もそうでした。しかし、なんとかなるものです。海外の研究室で研究できるのはもちろんですが、文化にも触れることができ、さらに自身の英語力を試す良い機会になると同時に成長できるチャンスだと思います。がんばってください。



ルーベンの市庁舎